

潤一郎あれこれ

谷崎が愛用した京三味線と「春琴抄」

濃い赤茶色の木箱に収められた、谷崎が愛用した京三味線。その木箱の蓋の裏には、谷崎が好んだ地唄「黒髪」の一節と花押が、自筆でしたためられている。

1923(大正12)年9月に発生した関東大震災に被災し関西に逃れてきた谷崎は、これまでのハイカラな横浜での生活から一変し、古い歴史や伝統文化が色濃く残る関西に移り住み、作風を大きく転換させた。1928(昭和3)年、



「谷崎愛用の京三味線」

日本の伝統の中にある「『永遠女性』のおもかげ」を、文楽の人形に見出した「夢喰う虫」を契機に、古典回帰を果たしたとされている。

その前年6月頃から、谷崎は大阪の地唄を習い始めた。祇園で聴いた地唄に感銘を受けた谷崎は、大阪の芸能に詳しい知り合いの新聞記者に習いたいと漏らしたところ、地唄の名手・菊原琴治検校を紹介された。谷崎は唄の稽古を希望していたようだが、唄と三味線は一緒に習うものという菊原検校の強い意志があり、唄と三味線の手ほどきを受けることとなった。谷崎の末弟・終平の回想によると、谷崎は「繰返し繰返し同じ手を飽きずに練習」し、遂にマスターするという真面目で実直な稽古ぶりであったという。神戸岡本の自宅に出稽古をお願いし、熱心に励むその姿は、いわゆる旦那芸ではないと検校を喜ばせた。

こうして音曲の手ほどきを受けた経験は、昭和の名作「春琴抄」(1933年)へと結実した。春琴は、盲目の天才音曲師として描かれる

が、芸に邁進した彼女が奏でる「精妙な撥の音」を聴いた弟子たちに、あの三味線には仕掛けがしてあるのではないかと不審に思われる場面がある。そうした天賦の才能を示す春琴のエピソードは、菊原検校の実話に拠ったものとされている。と同時に、美しくも驕慢な春琴と、彼女を献身的に支える佐助という二人の特殊な主従関係は、のちに三度目の妻となる松子夫人との、秘めた恋愛を反映している。

珠玉の名作は、実在する天才音曲師と、谷崎の恋愛を背景に生まれたのであった。



「三味線を弾く谷崎」

芦屋市谷崎潤一郎記念館 永井 敦子

当館は1988(昭和63)年の開館から35年を経た2023年4月に機械設備等の改修工事を終え、リニューアルオープンを迎えた。4月15日にはリニューアルオープンの式典が隣接する芦屋市立美術博物館とともに開催され、約100人の関係者が出席した。

新たなアプローチとして、ロビーに大型モニターが設置され、谷崎の人となりや生涯、谷崎と芦屋のつながりを知ることのできる映像が常時ご覧いただけます。

ただけるようになった。また、お手洗いは谷崎潤一郎の随筆「陰翳礼讃」の世界が感じられる空間へ一新。

当館の庭園は谷崎が一時居住した京都・潺湲亭(現・石村亭)の庭を模しているが、庭、展示室、ロビー、お手洗い、それぞれの空間が響き合い、より谷崎潤一郎の世界が体感できる場所へと生まれ変わっている。名作「細雪」の舞台ともなった芦屋で、谷崎文学の妙味を感じていただきたい。

芦屋市谷崎潤一郎記念館

谷崎記念館だより

vol.5 2023

谷崎記念館だより 2023

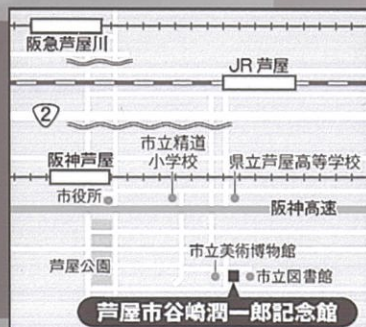
2024年3月1日発行

発行者 芦屋市谷崎潤一郎記念館

〒659-0052 兵庫県芦屋市伊勢町 12-15

Tel 0797-23-5852 Fax 0797-38-3244

HP: <https://www.tanizakikan.com/>



交通	
徒歩	阪神芦屋駅から南東へ15分
バス	阪急芦屋川駅・JR芦屋駅・阪神芦屋駅
いずれも「緑町」下車	東へ徒歩1分
駐車場	隣の美術博物館 20台、図書館 47台

リニューアルオープン記念 特別展

2023年4月15日(土)～9月10日(日)

新生文豪

～谷崎、阪神間へ・100年の一歩～

「関東大震災直後の
浅草凌雲閣」



秋の特別展

2023年9月16日(土)～12月10日(日)

モノたちの物語り

～展示資料を楽しむ～



「谷崎臨終の文机」

展示ケースの中のモノたちには、それぞれに物語がある。ふっつう、そんなモノたちの発するさまざまな言葉(情報)は、選り分けられ寄せ集められ、たとえば文豪谷崎を主役に立てた展示という「大きな物語」の一部として仕立て上げられていく。秋の特別展では、そんな展示資料の方こそを主人公にしてみた。



冬の特別展

2023年12月16日(土)～2024年3月10日(日)

谷崎が棄てた「細雪」

～反古原稿の中の名作～



「『細雪』
下巻反古原稿」

7枚の「細雪」反古原稿は、岡山県勝山町の、谷崎の疎開先宅に遺されていた。戦後、1945(昭和20)年末より翌年にかけての滞在中に、書き棄てられたものである。

内容は、下巻の10章～11章にあたる。が、話の流れは大きく異なり、妙子(こいさん)と以前の恋人・奥畑啓三郎(啓坊)との結婚が進むように展開。彼女の未来は、穏やかなものとなりそうだが、今見る作品終末の、妙子を覆う暗澹とした運命は、入り込む余地が無い。

戦争を掻い潜るように執筆された「細雪」。その中でも、敗戦をはさんで新しい時代へと書き継がれた下巻。世の転変の下で谷崎が棄てた、7枚の原稿が物語るものを読み解いてみた。

春ロビーパネル展

「谷崎の見た芦屋、谷崎の生きた芦屋」



「芦屋本通り商店街
1937(昭和12)年」

100年前の1923(大正12)年9月、関東大震災を逃れた谷崎潤一郎は、その後20年ほど、阪神間に暮らす。そのうち芦屋住まいは、足掛け3年。が、震災の後、命がらから谷崎が、最初にたどりついたのが芦屋。また、最期の妻ともなる「運命の女性」松子夫人との同棲を始めたのも芦屋で、この地との縁は深い。

名作「細雪」の舞台となったのも、芦屋への谷崎の愛着の表れだろう。

文豪が足を運び、眼に映しもしたことだろう、昔日の芦屋の風景をテーマとしたパネル展示。



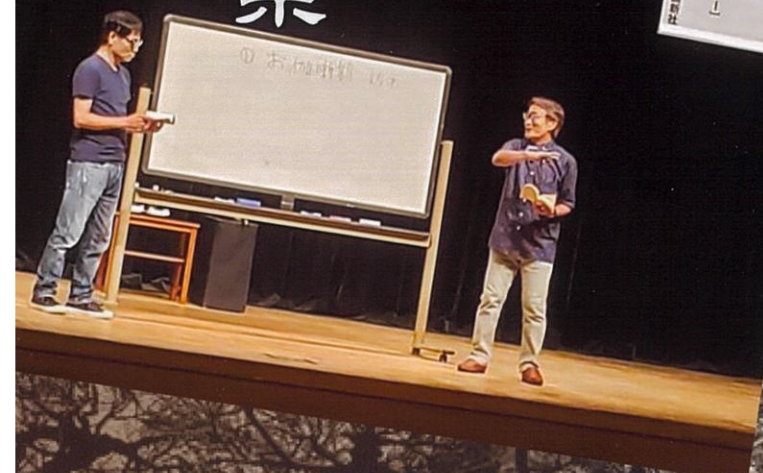
残月祭

痴人の愛

対談 奥泉光

第37回

残月祭



いとうせいこう・奥泉光 対談

谷崎潤一郎 「痴人の愛」

文豪・谷崎潤一郎を偲び、誕生日を祝う『残月祭』。今年から、より多くの方々にお越し頂こうと、これまでの慣例であった誕生日当日(7月24日)の開催から、誕生日に近い土日での開催となり、23日(日)に芦屋ルナ・ホールにて行った。

今回は、作家・クリエイターのいとうせいこうさんと小説家・奥泉光さんのお二人にお越し頂き、「痴人の愛」について自由にお話し頂いた。お二人の恒例イベント「文芸漫談」スタイルで、舞台の中央にホワイトボードを掲げ、奥泉さんが分析・解説され、そこにいとうさんの素早く鋭い突っ込みが入り、お二人で「痴人の愛」を読み解く大変楽しい対談であった。会社員の譲治が浅草のカフェの女給ナオミを見初めて一緒に暮らすものの、彼女の性的な魅力に征服されていく本作について、会社員という新中間層(譲治)に向けて、浅草の下層社会(ナオミ)から攻撃をかける物語と捉えた。さらに、ナオミが変化していくさまを「怪物成長期」「蠢動期」など五段階に分けて分析され、譲治が屈服されていく様相を跡付けられた。

お二人の楽しい掛け合いに会場は終始笑いが絶えず、来場者は谷崎文学の世界を堪能した。

2023.4-2024.3

芦屋市谷崎潤一郎記念館